

キリスト教委員会のHP(<http://rakuno-ce.org>)にアクセスして事前に聖書や讃美歌の確認をしましょう。

らは人々と共にざわめく。<sup>13</sup> 打ち破る者が、彼らに先立って上ると 他の者も打ち破って、門を通り、外に出る。彼らの王が彼らに先立って進み 主がその先頭に立たれる。

#### 【奨励者からのメッセージ】

私は群馬県高崎市の都市近郊農村の米・麦・養蚕を営む農家の次男に生まれ、実家の農業を手伝いながら育ちました。当時は、機械化は進んでおらず、稲作は手植え、手刈りの時代でした。高校卒業まで暮らした農村の変貌も目の当たりにしてきました。近くに大規模な工業団地と住宅団地ができ、風景も生活も変化を余儀なくされてきました。都市的開発の圧力下で、農業は縮小し、消えていくものだという現実を、当時はそのまま受け入れていました。大学で最初に学んだのは経済学理論でした。現代社会の仕組みを理論と歴史から解き、未来を展望する学問です。難解でしたが、壮大かつ精緻な理論に魅せられました。世界観を与えられるような気がして、大学3年になるまでは、所属していた研究部（文系のサークル）の読書会に熱中しました。その後、現実に身の回りで起こっている様々な事象を理解するためには、別の方法論が必要だということ意識するようになりました。ゼミに入って卒論を書こうかと思ったのがきっかけです。卒論では、戦後の高度経済成長の中で、立ち遅れた農業と農村の実態を分析し、今後の方向性を展望したいと考えました。大学院を経て、東京都農業会議という農業団体に就職しました。そこで仕事をする中で、都市化地域に存在する農地には高額な税金を課して、農業経営が成立しないようにする政策が行われていることを知り、驚きました。当時の都市政策は、都市と農村は両立せず、都市から農村を完全に排除するという考え方が主流でした。それに対して、都市に農業を存続させる取り組みが、三大都市圏の農業団体との連携で、激しく進められていました。都市の農業者の中には、追い立てられるアメリカ原住民に自分たちをなぞらえる人もいました。ささやかな経験でしたが、その当時考えたことが、その後の研究生活と人生のベースにもなっています。それは、存在するものには、必ず合理的な理由があり、他者は、まずそれに気づき、理解することが大切だということです。

【来週 12月24日はクリスマス礼拝です】

【前回の出席者】 2019年12月10日

学生 211名 教職員他 8名 計 219名

【前々回の出席者】 2019年12月3日

学生 221名 教職員他 8名 計 229名

## 【大学礼拝週報】 2019年度 第27号（後学期第12号）

2019年12月17日（火）午前10時40分

酪農学園大学 黒澤記念講堂

### 《大学礼拝》

司 式 高橋優子（キリスト教学教員）  
奏 楽 佐藤理恵（野幌教会会員）  
讃美指導 相原晴伴（循環農学類教員）

前 奏 「いざ来ませ、異邦人の救い主よ」（アーベル作曲）

讃 美 讃美歌 405 番（神ともにまして）

聖 書 ミカ書 2 章 1-13 節

祈 り

さんび

酪農学園大学聖歌隊

奨 励 「他者を理解すること」

發地喜久治（循環農学類教授）

讃 美 讃美歌 452 番（正しく清くあらまし）

報 告

後 奏 「神のみ子は来たりたもう」（ペッツォート作曲）

### 【本日の聖書】 ミカ書 2 章 1-13 節

<sup>1</sup> 災いだ、寝床の上で悪をたくらみ 悪事を謀る者は。夜明けとともに、彼らはそれを行う。力をその手に持っているからだ。<sup>2</sup> 彼らは貪欲に畑を奪い、家々を取り上げる。住人から家を、人々から嗣業を強奪する。<sup>3</sup> それゆえ、主はこう言われる。「見よ、わたしもこの輩に災いをたくらむ。お前たちは自分の首をそこから放しえず もはや頭を高く上げて歩くことはできない。これはまさに災いのときである。」…<sup>12</sup> ヤコブよ、わたしはお前たちすべてを集め イスラエルの残りの者と呼び寄せる。わたしは彼らを羊のように囲いの中に 群れのように、牧場に導いてひとつにする。彼